

深遠かつ甘美な語り口の 歌姫が紡ぎ出す“音の瞑想”

取材・文 / 石川真男

Interview & Text by Ishikawa Masao

ARTISTS INTERVIEW Jazz & Fusion グレッチェン・パラーテ

gretchen parlato

©David Bartolomi

ニューヨークを拠点とする新進の女性ジャズ歌手グレッチェン・パラーテ。ハービー・ハンコックやウェイン・ショーターからも絶賛を受けるその歌声は、新作『ロスト・アンド・ファウンド』でも相変わらず絶品。いや、いっそう深化し、さらに豊かに繊細になった印象だ。

「そう言ってくれてうれしいわ。そうした変化は、年を重ねるにつれて、そして自分の声をよりいっそう理解していくにつれて、時間をかけて起こったものだと思う。それに、声を絞り出そうと懸命になることがなくなった、ということもあるかも……。リラックスして、でも同時により深みを持たせることができるようになったの。自分たちの音楽に豊かさや深みがあるということ、以前よりも感じるようになったわ」

シンプリー・レッドやメアリー・J.ブライジ、パウリーニョ・ダ・ヴィオラなど幅広い選曲に瑞々しい解釈を施し、ウェイン・ショーターやマイルス・デイヴィスの定番曲には自作詞を付けて歌い綴る。また、自作曲を含めたオリジナルも多数収録するなど、独自の音世界を構築。多方面で活躍するジャズ・ピアニスト、ロバート・グラスパーとともに自らもプロデュースを

手がけるそのサウンドは、ジャズの即興的なダイナミズムよりも音響的な美しさを重視しており、ジャズの域を超えた普遍的な響きを獲得している。

「セロニアス・モンク・インスティテュートでテレンス・ブランチャードのもとで学んでいたとき、テレンスはよく私たちに、アンサンブルの構造を理解し、それを100%生かすようにって言ってたわ。みんなが同時にプレイする必要はなくて、ときに音を鳴らさずにほかの音にスペースを与えることも大切だって。それで私は、それぞれのプレイヤーや楽器の役割を意識するようになったの。彼は私たちに、ときに“弾かない”ことが効果的であることを気付かせてくれた。それで私は、音と空間の対比や、沈黙や静寂の美しさといったものが大好きになったのよ」

抑制された歌声と引き算から生まれるサウンドの造形美。そこにどことなくスピリチュアルな響きが感じられるのは、15年間も続けているというヨガからの影響もあるのかも……。

「ヨガは人生を変えた……。救ってくれたと言ってもいいわ。呼吸に意識を集中させ、身体や心や精神のことを理解する

というシンプルな行為は、動きを伴う瞑想のようなもの。音楽も同じよ。ヨガの基礎は、息を吸ったり吐いたりしながら身体を動かすこと。これは、歌うことに大いに関係するわね。声が身体の中で響く感覚や、さまざまな母音や子音を鳴らす感覚、といったことに通じると思うわ」

まさに心と身体を解きほぐし、えも言われぬ快感を与えてくれる歌声。深遠かつ甘美な語り口の歌姫が紡ぎ出す“音の瞑想”にどっぷりと浸っていただきたい。

Profile

ニューヨーク生まれのジャズ・シンガー。父親はフランク・ザッパなどのアルバムに参加するベーシストのデイヴ・パラーテ。2004年に新人の登竜門であるセロニアス・モンク・インターナショナル・ジャズ・コンペティションのヴォーカル部門で優勝し、翌年自主制作盤でデビュー。2011年8月に人気ジャズ・ピアニスト、ロバート・グラスパーもプロデューサーとして名を連ねるアルバム『ロスト・アンド・ファウンド』を発表した。

New Album



ロスト・アンド・
ファウンド
(YG-YMCJ-10011)

グレッチェン・パーラト

ロスト・アンド・ファウンド

ヤマハミュージックアンドビジュアルズ©YMCJ-10011 ¥2,800 [8.24] Jazz & Fusion



①ホールディング・バック・ジ・イヤーズ②ウィンター・ウインド③ハウ・ウィ・ラヴ④ジュジュ⑤スティル⑥ベター・ザン⑦アロー、アロー⑧サイクリング⑨ヘンク⑩イン・ア・ドリーム (REMIX) ⑪オール・ザット・アイ・キャン・セイ⑫ミー・アンド・ユー⑬ブルー・イン・グリーン⑭ロスト・アンド・ファウンド⑮ウィズアウト・ア・サウンド⑯リタフライ (Live Version) / 演奏: グレッチェン・パーラト (vo, perc) タイラー・アイグスティ (p, フェンダーローズ) ダイナ・ステファンス (ts) アラン・ハンブトン (vo, g) デリック・ホッジ (b) ケンドリック・スコット (ds)

問: ヤマハミュージックアンドビジュアルズ
[Tel] 03-6892-6210

☑ 軽い口当たりで腹持ちがよい

2004年に彼女がモンク・コンペのヴォーカル・コンテストで優勝を飾った模様をドキュメンタリー風にした映像が、主催者のHPにアップされている。ほかのファイナリスト3人が皆、見せ場作りにも熱中しているのに比べ、グレッチェンひとりが内面を深く掘り起こす感じにいく。クインシー・ジョーンズやアル・ジャロウら審査員たちの心を捉えたのはそこだった。ではさて、それから7年、圧倒的に進化した本作を聴かせたら、“私たちの目に狂いはなかった”どころか、“まさかそうなるとは夢にも思わなかった”となろう。ひと口に言えば、これにてついに、歌世界の浮遊感と実在感が、しなやかに肩を組んだ。Breathyヴォイスと呼ばれる囁き系では、これでまたほかをぐんと引き離し、まずもって最先鋒の座を譲らないだろう。あちこちどこかフワッと謎めいているのに、聴き終えた後味の構造はがっしり。そのことが僕にはとくに⑬の拡大解釈に象徴的で、罫から抜けられないでいる。(成田 正)